



2022年
復活祭号 Web版



発行所
カトリック高幡教会
あゆみ編集委員会
TEL042(592)2463

主任司祭 ヘロツティ・ジャンルーカ

主はこう言われる。
『見よ、新しいことを
わたしは行う。
今や、それは
芽生えている』
(イザヤ43・19)

皆様、主のご復活の喜びを申し上げます。おめでとうございます。
HAPPY EASTER!
「主は復活された！」この良いお知らせ(Good News)は、二千年前から、この時期のみならず毎週日曜日イエスのご復活を祝うあらゆるところで響き渡ってきました。今年も世界中の数え切れないほど多くの教会に集まった人々の中で、神の偉大な業が喜びを持って「主は復活された。アレルヤ！」とほめたたえられています。
旧約聖書、詩編のことばです。「わたしの正しき、わたしのまことを顧み、救ってください。心と思いを正しくさばかれる神、あなたに逆らう者の悪を断ち、従う人を強めてください」(7・9b-10)。イエスの復活の神秘を深めると、この箇所は不正や迫害や災いに直面する人に希望や慰めを与えるだけのことばではなく、神と親しく関わって神のみこころと正

義を知る人の叫びでもあることがわかるでしょう。新約聖書、ヘブライ人への手紙にイエスについて同じことが書かれています。「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられませんでした。そして、完全な者となられたので、ご自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となりました」(ヘブライ5・7:9)。
皆さん、二年を経たコロナ禍、ウクライナでの悲惨な戦争、また自らの困難などの闇のただ中で、「主は復活された！」という私たちの信仰の核心を宣言し、それが魂の中に神秘的に響いているか、それとも遠くに感じていることか、思い巡らしてみましよう。
イエス様が二千年前ご復活なされた季節は確かに春でした。イスラエルは日本と同じように四季に恵まれ、春になると荒れ野でさえいろいろな花が咲き乱れます。ご復活を春に祝うのは偶然ではありません。美しさや素晴らしさを私たちに贈ってくださる大自然の創り主は、永遠の命を私たちにもたらしたご復活の救い主と、同じ方なのです。
四旬節第五主日のミサの第一朗読にこのことばがありました。「主はこう言われる。『見よ、新しいことをわ

たしは行く。今や、それは芽生えて
 いる。』(イザヤ43・19)
 主のご復活、すなわち神のみ業は
 まさにその通りです。
 皆さん、俳句はいかがでしようか。
 先日ネット上である俳句を見つけま
 した。

「菜の花や 月は東に 日は西に」
 (与謝蕪村)

この美しい詩がとても気に入ら
 した。なぜならご復活のお祝いにも
 当てはまるのではないかと思つたか
 らです。すなわち、「主の復活や 月
 は東に 日は西に」と。

さてご存知のようにルカ神父は復
 活祭を最後に足立区の梅田教会に異
 動する予定です。この二年半の短い
 間、教会や司祭を支えてくださった
 神様をはじめ、皆様に心を込めてお
 礼を申し上げたいと思います。本
 当にありがとうございます。

そしてイエス様が私たち一人ひと
 りを祝福し、これからもどんな状態
 にあっても希望と信頼をもつて歩み
 続けられるよう、復活された主の愛
 と光が満ち溢れるほど与えられます
 ようにお祈りをいたしましょう。
 改めて主のご復活、おめでとうご
 ざいます。

HAPPY
 EASTER!



教会委員会だより

教会委員会委員長

ご復活おめでとうございます！今
 年の高幡教会はご復活にかけて多く
 の出来事がありました。それは、こ
 のご復活のよるこびを多くの人に告
 げ知らせるための、神様のご計画の
 一部なのでしよう。そのような御心
 に応えるため、日々よろこびを持っ
 ていきたいと思ひます。

それでは、昨年十二月からの高幡
 教会の活動をお知らせいたします。

●十二月二十四日、二十五日 主のご
 降誕ミサ

二十四日(金)午後七時、二十五日
 (土)午前十時と午後四時の三回に分
 けて、主のご降誕ミサが行われまし
 た。このミサよりあゆみクリスマス
 号をお配りしています。

●一月一日午前十時 神の母聖マリ
 アのミサ

新年を迎えて、今年も元旦に神の
 母聖マリアのミサをお捧げしまし
 た。

●二月五日(土) 信者総会(午前十時
 と午後一時半)

今年の信者総会は、昨年同様、土
 曜日に地区毎に二つのグループに分
 けて開催しました。皆様のご協力、
 多くのご意見に感謝いたします。

●二月十一日(金)祝午前十時 ル
 ドの聖母のミサ(世界病者の日)

世界病者の日に、ルルドの聖母の
 ミサが行われました。ミサ中、希望
 者に病者の塗油が行われました。皆
 様が秘跡によつて強められ、希望を
 新たにされますように。また、有志
 の方により、ミサ後に聖マリア像前
 でお祈りが捧げられました。

●二月十九日(土)、四月二日(土) ゆ
 るしの秘跡

ルカ神父様により、それぞれ土曜
 日の午後一時半からゆるしの秘跡が
 行われました。

●二月二十七日午後二時 姉妹教会
 交流礼拝

高幡教会を拠点として、ZOOM 配信
 による姉妹教会交流礼拝が行われま
 した。各教会とも多くの方がZOOMで
 参加され、一つの場所に集まれなく
 ても共に祈る事が出来る、確かな希
 望を見出しました。

●三月十九日(土)十時 聖ヨセフの
 祭日のミサ・ゆるしの秘跡

レデンプトル修道会の萩原神父
 様をお招きして、聖ヨセフの祭日の
 ミサをあげていただきました。また、

ミサ後にゆるしの秘跡を行っていた
だきました。

●三月二十一日(月・祝) 下瀬智久助
祭叙階式

レデンプートル修道会の下瀬智久
神学生の助祭叙階式が、初台教会で
執り行われました。高幡教会からは
ルカ神父様含め六名が代表して参
加、お祝いいたしました。

●三月二十七日 四旬節のための黙
想会

萩原神父様をお招きして、主日ミ
サをあげていただき、お説教の時間
に講話をしていただきました。また、
同日がメルセス会のシスターが主日
のミサに来られる最後の日だったた
め、五十年間の感謝を込めて花束を
贈呈いたしました。

●金曜日午前十時ミサ後、聖体顕示と
十字架の道行

四旬節中は、金曜日午前十時のミ
サ後に、聖体顕示または十字架の道
行を行いました。

世界は今、想像も出来なかつたよ
うな暗闇の中にあります。三月二十
五日にロシアとウクライナの平和の
ために世界で心を一つにして祈りま
した。未だ暗闇は明けていません。
それでも、ご復活の光が、このよい
知らせが、この暗闇を必ず払ってく
まると、主を信じて祈り進んでいき
ましょう。

助祭叙階

高幡教会の皆様

レデンプートル修道会
下瀬智久

皆さんお元気ですか。このたびは私の
助祭叙階式のために、神父様を筆頭とし
て代表の皆さんが参列してくださった
だけでなく、多くの方々からたくさん
のお祈りをいただいて、本当にありがと
うございました。思いがけないコロナ禍の
ため、様々な制限や制約のもとでの式と



助祭叙階式後に菊地大司教様と一緒に(初台教会)

なり、直接お会いしてお礼を申し上げる
ことが出来ないことを心苦しく思っ
ています。

助祭の務めは、祭壇での奉仕を通して
教会と社会に仕えることです。今の世の
中に目を向けるならば、コロナ禍だけ
でなくウクライナ紛争など、深く考え込
まざるを得ない多くの問題に思い至りま
す。個人の力でどうにか出来るような小
さな問題ではありませんが、受難と復活
を通して永遠の命へと至る道を示して
くださったキリストの模範にならない、そ
の福音を伝える務めを受けた者の一人
として、これから遣わされる大阪での
日々の奉仕の中で、ほんの僅かであつて
も希望を証していくことが出来ればと
思っています。どうぞ引き続きお祈りを
お願いいたします。

四月に入って暖かくなり、自然豊かな
高幡教会の周りにはたくさんの花が咲き
ほこっている頃でしょうか。風の便りに
よると、教会学校で関わった子どもたち
も、それぞれに卒業や入学といった大き
な節目を迎えていると聞いています。一
人ひとりの成長を喜ぶとともに、春の訪
れ、そして御復活とともに始まるこの一
年が、皆様にとつて恵み深い一年となる
ように心からお祈りいたします。そして
出来るならば、一年後に予定されている
祭叙階式の頃にはコロナもおさまつ
て、直接お会いして祝うことが出来れば
と願っています。
またお会い出来る日を楽しみにしつ
つ。感謝のうちに。

二〇二二年復活祭での受洗者寄稿
受洗おめでとうございます

洗礼に至るまで

マリア・ベルナデッタ Y・S

わたしが初めてキリスト教に出会ったのは、幼稚園生の時でした。クリスマス会が楽しみだったことが思い出されます。園長である牧師先生の教えもあり、毎日寝る前に神に祈ることが習慣になりました。

小学校から高等学校まではキリスト教とは関係のない学校で過ごしましたが、寝る前のお祈りは続けていました。祈ることで安心感を得ることができたのです。その後、大学では週に一回の礼拝があり、牧師先生のお話と讃美歌、祈りの時間は私にとってはとても有意義で、「教会に通いたい」と思うように暮らしていました。しかし、優柔不断な私は就職、結婚、出産、子育てなどに気を取られて、教会に通う勇気がなく、時間が過ぎてしまいました。

子育ても終わり、教会に行ってみようと思い立ち、近所の教会を訪ね始めました。そして、あるプロテスタントの教会に約三年間通いましたが、洗礼を受け

る気になれませんでした。その後、カトリック教会とはどんなところかと思いついて、高幡教会にめぐり会いました。初めてカトリック教会のミサに与り、優しく案内をしてくださった方に恵まれ、プロテスタント教会とは違う厳かなミサに感動を覚えました。そして求道者として、パンデミックの中、約一年半、通わせていただきました。日曜日はのんびり家で過ごすのが日課だった私が、毎週教会に通うことができたのは、やはり聖霊の導きだったと思います。

月に二回の勉強会では今まで知らなかったキリスト教について学ぶことができ、洗礼への気持ちが高まり、洗礼を受けたいと思うようになりました。

まだ歩き始めたばかりの信者ですが、焦らずゆっくりと成長していきたいと思えますので、優しく、見守っていただけたら幸いです。よろしくお願いいたします。

洗礼式を待つ

ベルナデッタ K・N

未だコロナ禍において、洗礼式を執り行つて頂けますこと、本当にありがとうございます。

神さまとの出会い、私の母は、学生の時にプロテスタントの洗礼を受けたとのこと、私をミッション系の幼稚園に

入れてくれました。週一回の牧師さま来訪と、祈りの記憶しかありませんが、それからずっと神さまとお話していました。子供の頃から、母と祈りや讃美歌を歌っていました。

その後、高校・大学でピアノを学び、卒業後、バツハを歌う合唱団の伴奏者になりました。ミサ曲、受難曲他、多くの曲を学び、また指揮者を始め、団員さんにもカトリック信者さんが多く、お話を聞く機会もあり、私は音楽と祈りの中で、いつも神さまを近くに感じていたように思います。私もいつか洗礼を願い、二〇一九年クリスマスに高幡教会に伺いました。そして、なぜ今年だったのかなど。勉強会で、ずっと教えて頂いたルカ神父さまに授けて頂けること、洗礼式の四月十六日はベルナデッタさん帰天、そして私の誕生日であるという巡り合わせも神さまの導きと思いました。

代母さまになって下さる那須塩原在住のクララA・Fさんは、同じ大学の友人です。私が受洗する時は代母になりたいと、ずっと言ってくれました。その夢も叶い、私の今までの人生の出来事は神さまの思召し、感謝の気持ちでいっぱいです。ルカ神父さまは、洗礼後は信者の卵と、おっしゃいました。ちゃんと雛にかえることができるように、そして成長できるように、これからもしっかりと学んで行きたいと思えます。

ルカ神父さま、ありがとうございます。そして、高幡教会の皆さま、これからどうぞよろしくお願いいたします。



講話中の萩原神父様

四旬節第四主日ミサの
説教の中で黙想会講話

回心「ゆるし」と 「ゆるされた人の信仰生活の 歩み」

レデンプトール修道会

司祭
萩原 義幸

三月二十七日にカトリック高幡教会のミサの説教の中で黙想会の講話をさせて頂きました。テーマは、回心「ゆるし」(九時三十分ミサ)と「ゆるされた人の信仰生活の歩み」(十一時三十分ミサ)でお話をしました。前者は、ゆるしの秘跡について体験談も含めて

て、秘跡の受け方をお話ししました。後者は、旧約のヨセフ物語から始めて、出エジプトの出来事を思い巡らし、信仰について見つめました。

はじめに、四旬節第四主日の福音の「放蕩息子のたとえ」話から話し始めました。「弟の方の違った視点を紹介しました。弟の方の息子を中心にとえ話を見ていく視点」と「父親を中心にとえ話を見ていく視点」として、「兄の方の息子を中心にとえ話を見ていく視点」です。弟の方の息子の視点で読むと「文字通り、回心の歩み」です。この視点で読むと「どのようなことがあっても父なる神はゆるしを与えてくださる方」として、身にしみて感じる物語となります。父親の視点で読むと「慈しみ深い父親の姿」が現れてきます。

兄の方の息子の視点で読むと「二人の感動的な再会を冷めた目で見てしまい、真面目に働いたとしても報われないうような思いが支配する」ようになります。

この「放蕩息子のたとえ」の主役は明らかに父親です。父親は天にいます神を示しているでしょう。私たちは弟か兄ということになります。失ってはじめて、天の神と共にいた時の何にも変え難い愛の深さを知った弟の気持ちに近いのか、また、いつでも共にいてくださる神が当たり前となって、そのことに気づかずか、いつしか天の神と共にいることが義務になつてしま

っている兄の気持ちに近いのか、私たちはどちらの歩みをしているのでしょうか。弟と兄、どちらも神に立ち返る必要がある存在です。私たちは、それぞれの回心の歩みをふり返るように招かれています。

ゆるしの秘跡では、使徒言行録9章の「パウロの回心」を紹介してから「心の糾明」と「悔い改め」について体験をお話ししながら考えました。「心の糾明」は、自分が謝らなければいけないことを思い起こすことです。そして、「悔い改め」は、それが本当に悪かったと思っているかどうかということに、神からの愛を感じるようにしてくださいと呼びかけました。なぜなら、私たちは、愛を感じられないときには、自分が悪かったことを認めて、ゆるしを願うということにはつながらないからです。

旧約聖書のヨセフ物語(創世記三十七章から)から出エジプトの出来事(出エジプト記)までをふり返りました。その中で、「わたしはある」という神の名前は、「本当に存在して、あなたを導き、支えている」という意味に響くこと、そして、わたしたちの信仰の出発点が「神に向かつて問いかけること」ではないかと紹介しました。荒野野という過酷な環境の中で、年間も旅を続けた民は「本当に神は共にいてくださっているのですか？」と神に問いかけます。この問いかけはとても大切な

と思います。ともにいて、支えてほしい
 くなければ、あえて祈りの中で「神に
 共にいてくだらないのですか？」と
 問わないからです。本当に望んでいる
 からこそ、人は叫びをあげるのだと思
 います。そして、信仰の歩みは、この
 問いを繰り返しながら、それでも神に
 信頼して進んでいく時に、深まってい
 くように感じます。

私たちは、日々の生活の中で起こつ
 てくるさまざまな困難や苦難に直面し
 て、神に問いかけながら、神がともに
 いて支え、導いてくださっていること
 を感じながら、信仰を強めていくよう
 に招かれているのです。私たちは、神
 がいつも導いてくださることを心に留
 め、神の愛を感じながら、信仰を強め
 ていくように招かれています。神とと
 もに歩むことの心強さを私たちは、い
 つも忘れないようにしていきたいと思
 います。真面目に教会生活を送っている
 からこそ、忘れがちになる「神と共に
 いることのできる喜び」をこの四旬節
 の間、思い返し、頑なに心を開かない
 兄のようにならず、父なる神の招きに
 心を開くことができずように、回
 心の恵みを願ってお祈りいたしましよ
 う。

高幡教会の皆さん、実り豊かな四旬
 節をお過ごしください。そして、喜び
 のうちに復活祭を迎えることができま
 すように、私も皆さんのことを思いな
 がら、お一人お一人の上に神の祝福が
 ありますようにお祈りしております。

メルセス会日野修道院シスター別れの挨拶
 シスターたちと共に過ごせた日々、
 信徒一同、心を込めて感謝申し上げます。
 これからも神様の恵みの元、お元気で
 お過ごしすようお祈りいたします。

お別れのメッセージ

シスター清水靖子

二〇一一年の桜の季節から、二〇二
 二年の桜の季節まで、十一年間にわた
 ってこの日野の丘の教会で、皆さまと
 共に過ごさせていただきました。お一
 人お一人との出会いを生涯忘れること
 はないでしょう。大変お世話になりま
 した。楽しい十一年間でした。

日野の丘の日々は、たとえようもな
 く素晴らしいものでありました。早朝



修道院前でのシスターたち

の薄墨色の空から始まる一日、靄の林
 で鳴き交わす小鳥たち、昼にはさわや
 かな風が流れ、夕べには金星がまたた
 きをはじめ、一日の終わりに満月と
 蛍の光の日野の森、ささやかではあつ
 ても、私たちの修道院は、その丘の夜
 の灯台のように、見守ってきました。
 いま、この美しい場所から別れを告
 げるのは、とつても辛く、名残惜しさ
 でいっぱいです。

でも、皆さまがきつと、愛と優しさ
 と祈りをもって、この美しい森の教会
 を、生き生きと育てて行ってくくださ
 ると信じ、心から応援し、お祈りをする
 ことをお約束申し上げます。

今度は、メルセス会の本部でお会い
 しましょう。再会の日を楽しみにして
 おります。

カトリック高幡教会

信徒のみな様

シスター笠松儀子

日野のメルセス会を去るに当たり多
 くのご好意と心づかいに簡単ですが感
 謝の心を現わしたいと思ひます。本当
 にありがとうございます。

五十年間の関係を思い出し、このこ
 とを聞かれた時、驚きと何とも言えな

いさびしさ、空しさのようなものを感じられたのではと推測いたします。特にこの教会の初期から関わって来られた方々は尚更のことと思います。私も一つの時代、歴史の終わりを感ぜさせられております。私は初期の段階にはおりませんでしたので、他の人をおしてうかがったことですが本当に感謝しております。

一九九八年から二〇〇〇年の三年間、教会学校、中高生会に関わりました。九年後の二〇〇九年に戻ってきた時、その当時の子どもたちが各々に成長して高校生、大学生、社会人、リーダーにもなっていてとても嬉しかったことを思い出します。このようにして何人かの信徒で始められた教会がこれからも成長、発展していくことを願っております。

ご復活には二名の受洗者がおられることを頼もしく思っております。教会の柱として成長するようお願い、陰ながら祈っております。

教会学校はその成長のためとても大切なグループですが、少子化、コロナの影響でますます人数が少なくなり、とても残念に思っております。コロナ期に入った時、どうなることかと思っておりましたが、有志の大人の方々が半年後に月一回として立ち上げ、何とか一年半続き、二十一年度に一人が卒業しました。二十二年度には二名の新生がいますとのことうれしく思っております。

信仰生活の始まりは家庭ですので、小さいお子様をお持ちの方はまだ意識が芽生えないうちからお祈りの声を聞かせること大切ではないかと思えます。それは各々の成長段階においてその子供にとって幸せなことではないかと思えますが……そして「ごめんなさい」と「ありがとう」の心を育てることとは神の存在に目覚めさせる土台と思えます。一日の終わりに、寝る前に見えない神さまの面前で心静めてどのような一日であったかを思い出させる。そして「ごめんなさい」と「ありがとう」、そして「ごめんなさい」と「ありがとう」を願ってやすむことができたなら幸せなことだと思えますが……このようなことは毎晩は無理かもしれませんがこのような心掛けが必要と思えます。

最後に最近読んだ心を育てる詩の一節を紹介させていただきます。ご存知かもしれませんがそれは「そよ風のように生きる」というイエズス会のバレンタイン神父様（インドの方）が書かれた最後のページにあるさいごのことばです。

「主よ。私があなたの先を歩むのではなくあなたの後を歩むのでもなくあなたとともに歩ませてください。」

他にもたくさん心に残ることばがたくさんあります。よろしければ……深い感謝と祈りを込めて……神様と共に過ごしてくださいませ。

高幡教会の皆さま 主のご復活 おめでとうございます

シスター谷 昌子

ルカ神父様はじめ高幡教会の皆さまには沢山のご協力と支えを頂きましありがとうございます。ありがとうございました。

私たちはコロナ感染の制限の中で、お会いできない方や事もありませんが、どんな状況にあっても、祈りによる絆は大きな力であると思えますので、これからも皆様と心を合わせて、復活のイエスの喜びと愛されていることを人々に伝えていきますように祈り続けたいと思えます。

高幡教会の聖堂の、十字架上のイエス、私たちとともに歩みイエスへと導いてくださるマリア様、そしてご復活のイエス様が、大きく手を広げて、教会を訪れる全ての人を待っていてくださいます。人々とともにある宣教共同体の高幡教会皆さまとご家族の皆さまの上に神様の祝福と恵みをお祈りします。

ルカ神父様のあたらしい任地での宣教と司牧の上に聖霊の導きがありますように。いつも祈りで繋がっています。皆様お一人ひとりに感謝申し上げます。

姉妹教会寄稿

復活を望んで

日本ホーリネス教団
由木キリスト教会 牧師 小枝功

三月の終わりにになると、私は一つの出来事を思い出します。私のうちでは昨日おこったことのように鮮明に記憶していることですが、もう途方もない時が過ぎてしまったことです。約三十年前の三月、七十歳を過ぎたばかりの孤独な女性が国分寺の病院で亡くなりました。彼女が結婚生活の中で夫に裏切られ、病みつかれ、死を待つむなし療養生活を病院で送っていたのです。遊び好きの夫から移された梅毒菌が彼女の全身をむしばんでいました。彼女の手足はかろうじて切断をまぬかれています状態だったのです。肉体以上に、心と魂は病んでいました。「彼女」の口から出る言葉は、当然ながら他人を羨むか、呪うかの言葉でした。言葉は、直接、心をうつしだすものです。自分の生い立ちをのろい、すでに他界した夫をのろい、幸福そうに生きている周囲の人々を憎悪する言葉が、「彼女」の言葉のすべてでした。もし地獄があるとすれば、まさに「彼女」が生きている現実が地獄そのものだったでしょう。もしサタンが生きているとすれば、「彼女」に思う存分に語り

しめ行動させていると見えたのです。彼女の病室に一人の敬虔なキリスト者が心臓を患って入院してきたのです。その方は私の知り合いで、一九三〇年代の戦前の由木教会で勸士（信徒伝道者）であったAさんです。たまたまベッドが隣り合うことになったのです。Aさんは隣の女性の悲惨な状態を見て必死に祈り始めました。そして私はAさんのお見舞いでそこに立ち会うことになったのです。隣の女性の陰しい表情は、見知らぬ訪問者である私にも少しの遠慮も無かったことをおぼえています。Aさんは優しい言葉をかけ、戴き物をおすそわけしたりしました。が、戻ってくる言葉は野獣のような言葉だけでした。長年悲惨な環境におかれ続けた老人がそんなにたやすく優しい心に共振できるはずも無いのです。Aさんは祈りの人でした。必死に祈ったのです。ご本人も心臓を患ってその病院に入院していたのです。それも彼女が危篤寸前になるまで祈り続けたのです。やがてAさんの優しさで祈りがその女性へを変え始めていたのです。「彼女」は人間の心を取り戻しつつあったのです。「彼女」がなくなる二日前のことでした。Aさんはこう語りかけたのです。「〇〇さん、これは私が教会に行くために取っておいた履物です。」といいながら、和装用のうつくしい草履を取り出してこういいました。「これを履いてあなたは天国に行くのですよ。」それまで頑なにしがみつ

◆高幡教会のミサ時間◆
教会からの手紙をご覧ください。
◆高幡教会 HP の URL ◆
<https://www.cctakahata.jp/>

<編集後記>

ルカ神父様は二年半の間、コロナ過の厳しい状況中でも色々工夫されて信者が教会のことを考える時間を作ってくださいました。メルセス会シスターたちの教会のためのお祈りと笑顔が見えなくなるのは淋しいです。神父様、シスター達の新しい出発に大きな力が与えられますようお祈りいたします。(K)

Web 版は個人名を変更しています。

いた憎悪がガラガラと崩れたときでした。「彼女」は言いました。「もつたない。でも履かせていただきます。」陰しい憎悪、他人への憎悪に駆られていた表情は「彼女」の顔からすっかり消えていきました。二日後、まったく平安な心と感謝のなかに「彼女」は天国に旅立ったのです。一連の出来事を見つめていたわたしは、人が一瞬のうちに変わってしまうことが確かにあることを教えられたのです。神がAさんの祈りに答えてくださり、そこに心の奇跡を造り出してくださったのです。これも復活の一つの出来事ではないだろうか。一人の不幸な女性を神が救ってくれました。Aさんは履物を与えただけで、神は彼女を若い娘のように着物も帯も装って、天国にむかえてくださったではないでしょうか。Aさんはその後、十日ほどで天に召された。あの祈りは命をかけた祈りだった。この時期に私はこの奇蹟の出来事を思い出します。